國學院大學学術情報リポジトリ

「水・液体に関する」オノマトペの音象徴研究：音の組み合わせの観点から

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 金, 敬玲
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001508

「水・液体に関する」オノマトペの音象徴研究
―音の組み合わせの観点から―

金　　敬　玲

論　文　要　旨

日本語はオノマトペ（擬音語・擬態語）が非常に豊富な言語である。オノマトペは一般語彙よりも生き生きとした臨場感が溢れ、繊細かつ微妙な描写を可能にする。しかしながら、一般語彙に比べて意味上あいまいなところがあり、いわゆる感性的な言葉であるため、学習者にとっては習得困難な語彙範疇だとよく言われる。

本論文では、「水・液体に関するオノマトペ」という「特定の事象」に限定し、母音と母音の組み合わせ、子音と子音の組み合わせという「音の組み合わせ」の観点から音声特徴と意味との関係を明らかにすることを試みた。

キーワード：水・液体に関するオノマトペ　音象徴　母音の組み合わせ　子音の組み合わせ

1．はじめに

泉（1976）以降、日本語におけるオノマトペは擬音語・擬態語の総称として認識されてきた。日本語は、その特徴の一つとして、オノマトペを使った表現が非常に多いということが挙げられる。

雨宮・水谷（2006）では、日本語の語彙はオノマトペ、やまと言葉、漢語、外来語の四つの層からなっていると主張している。田守（2002）では、オノマトペは一般語彙よりも生き生きとした臨場感が溢れ、繊細かつ微妙な描写を可能にすることから、日本語には不可欠な言語要素であると述べている。

言語学においては一般に、言語の音とその語によって表される意味の間の関係は必然的なものでなく，恣意的なものであるとされてきた（ソシュール）。ところで、言語記号のこの恣意性という性質について反論があるとき、必ず持ち出されるのがオノマトペである。オノマトペにおいては、言語の音韻と意味との間に何らかの合理的・感覚的な結びつきが見られ、このような現象を音象徴という。すなわち、オノマトペのもつ基本的な音象徴的意味を、その語の構成する音から予測することができるとされる。

日本語のオノマトペ研究において、まず取り上げたいのは田守（1993）で提示された「日本語オノマトペの音韻形態」である。田守（1993）では日本語の音韻形態について１音節語基（CV[1]）を持つものと２音節語基（CVCV[2]）を持つものに分類し、特殊拍（促音、撥音、長音）と反復、語尾 ri の音韻特徴を示している。

浜野（2014）においても、日本語のオノマトペの語根タイプを提示し、CV に基づくものと CVCV に基づくものに分類し、同じく特殊拍の音象徴を提示している。田守（1993）とは異なり、浜野（2014）では、促音・撥音を語末、語中にわけそれぞれの音韻的特徴を分析し、長音に関しては、撥音の前と促音の前と、位置により異なる特徴を示している。また、これらに加え、重複と接尾辞「リ」、二重母音 /ui/ と /oi/ についても言及した。更に、音素ごとの音象徴を全て提示し、子音の音象徴においては位置によって異なる意味を持つと指摘したうえで、その意味を分析し整理している。

上記の他、金田一（1978）でも、擬音語・擬態語の形態を提示し、音象徴についてはおおまかに、母音における /e/ の「品の悪さ」、/i/ の「小さいこと・運動が速いこと」、/a/・/o/ が /i/ に対立することと、子音においては濁音の「鈍いこと・重いこと・大きいもの・汚いもの」という音象徴と、特殊音の拗音に関しては「俗語的で品が欠ける」という指摘があった。

ただし、これらの研究はあくまで「音素ごとの分析」に留まり、細かく区切られ過ぎている点も指摘できる。また、同じ子音であってもすべてのオノマトペで同じ意味として使われるとは信じがたく、オノマトペの音の構成に関して音素の単なる足し算だけではなく、「組み合わせ」からの観点からも考察したい。

そこで、本研究では、日本語のオノマトペにおいて、「音素ごとの分析」ではなく、「音の組み合わせ」の観点から、CVCV タイプのオノマトペを取り上げ、母音と母音の組み合わせ並びに子音と子音の組み合わせという「連なる音」の音象徴についての分析を試みたい。また、オノマトペにおける普遍的な音象徴ではなく、「特定の事象」に注目し、「水・液体に関する」オノマトペを対象に分析を行うことにする。

1　日本語の音節は子音と母音との組み合わせによるものである。本稿における日本語の音声構造は浜野（2014）で提示された音声構造を参考に、子音（consonants）を「C」と、母音（vowels）を「V」と表記し、２モーラ語基（CVCV タイプ）のオノマトペの音の組み合わせについて分析・考察する。

2　２音節語基（２モーラ語基）（CVCV タイプ）の音声構造を「しとしと」を例にすると、「しと」が語基となり、第１子音（C1）は /s/、第２子音（C2）は /t/、第１母音（V1）は /i/、第２母音（V2）は /o/ となる。

2．分析対象及び分析方法

本稿における分析対象のオノマトペは「水･液体に関するオノマトペ」に限定しており、『日本語オノマトペ辞典（小野正弘編2007)』で挙げられた「水･液体に関するオノマトペ」と、「天気に関するオノマトペ」から「雨」を表す表現を加えたもののうち、２モーラ語基を持つもの（CVCV タイプ）を選定した。更に、田守（1993）と浜野（2014）では特殊拍として扱った促音、撥音、語尾「リ」の音韻特徴については扱わないことにし、重複型の CVCV タイプの「水・液体に関する」オノマトペ58語のみを本稿の分析対象にする。

＜「水・液体に関する」オノマトペ　58語＞

カ行

―がばがば、がぼがぼ、こぽこぽ、ごぼごぼ、ごぽごぽ、ぐしょぐしょ、ぐじょぐじょ、ぐちょぐちょ

サ行

―さらさら、ざぶざぶ、しとしと、じとじと、じたじた、じみじみ、じくじく、じめじめ、じゅくじゅく、しょろしょろ、しょぼしょぼ、じわじわ、ずくずく

タ行

―だくだく、たらたら、だらだら、だぼだぼ、たぽたぽ、ちょろちょろ、どしゃどしゃ、とくとく、どくどく、どぶどぶ、どぼどぼ、とろとろ

ハ行

―ぱしゃぱしゃ、ばしゃばしゃ、はらはら、ばらばら、ぱらぱら、ひたひた、びしゃびしゃ、ぴしゃぴしゃ、びちゃびちゃ、ぴちゃぴちゃ、びしょびしょ、びちょびちょ、ぶくぶく、ぷくぷく、べとべと、べちゃべちゃ、べちょべちょ、ぼたぼた、ぽたぽた、ぽつぽつ、ぼこぼこ、ぽこぽこ、ぼろぼろ、ぼとぼと、ぽとぽと

分析方法としては、「水・液体に関する」オノマトペにおける母音の組み合わせの特徴を各辞典の意味記述および例文により分析・考察を行い、その後、子音の組み合わせによる特徴の分析を行うとする。

なお、意味記述に関しては、小野（2007)、山口（2003)、浅野（1978）を参照にするが、例文に関しては飛田・浅田（2002）から取り出すことにする。それは、小野（2007）らの古文から抽出した例文に比べ、飛田・浅田（2002）の例文が比較的にわかりやすいからである。

3．母音の組み合わせから見る音象徴の分析・考察

この節では、母音と母音の組み合わせによる音声特徴について分析する。

3.1　V1が共通するオノマトペの母音組み合わせによる特徴の分析

3.1.1　V1が /a/ のオノマトペの母音組み合わせ

/**a**/-/**a**/ →はらはら、ばらばら、ぱらぱら、がばがば、さらさら、たらたら、だらだら

/**a**/-/**u**/ →だくだく、ざぶざぶ

/**a**/-/**o**/ →だぼだぼ、たぽたぽ、がぼがぼ

/**a**/-/**ya**/ →ばしゃばしゃ、ぱしゃぱしゃ

母音構造が /a/-/V2/ であるオノマトペは、全体を見ると、運動する水・液体の量が非常に「多量」であるという共通点がみられる。これは、V1は「初期の物体の形」を表し（浜野2014）、母音 /a/ は「大きい（多い）」というイメージを表す（川原2017）という先行研究の説と一致し、V1=/a/ は「大きい」イメージを喚起し、それが水・液体のオノマトペの場合になると「多い」イメージになったと考えられる。

/a/-/a/ の組み合わせを見ると、「散らばる（はらはら）」「途切れなく（さらさら）」などの意味合いから、V2=/a/ という多量の液体の運動する範囲が「大きい（広い）」という特徴が得られる。

（1）未亡人は墓前ではらはらと落涙した。（飛田・浅田2002）

（2）大粒の雹が突然ばらばらっと降ってきた。（飛田・浅田2002）

（3）小雨がぱらぱらと降ってきた。（飛田・浅田2002）

（4）詰まっていた排水口を掃除すると、水ががばがばと音を立てて流れ落ちた。（飛田・浅田2002）

（5）春の小川はさらさら行くよ。（飛田・浅田2002）

（6）犬は肉のにおいによだれをたらたら流した。（飛田・浅田2002）

（7）狂犬病にかかった犬はよだれをだらだら流す。（飛田・浅田2002）

特に、「突然」「詰まっていた・排水口」「犬・よだれ」「狂犬病・よだれ」という表現から、液体の量の多さや及ぼす範囲の広さが伝わるであろう。

/a/-/ya/ の組み合わせを見ると、V1の /a/ により「多量」の水が伝わり、V2=/ya/ により、水滴が細かく飛び跳ねる様子がイメージしやすい。これは、川原（2017）で「小さい」イメージと結び付けやすいと述べたのが理由になると考えられる。

（8）波打ち際をばしゃばしゃ駆け回っている元気な子供たち。（浅野1978）

（9）メジロがぱしゃぱしゃと始めた。（山口2003）

/a/-/u/ においては、「流れる（だくだく）」、「揺れ動く（ざぶざぶ）」のような運動と関連性が強く、ここでは低母音 /a/ と高母音 /u/ の「大きさ」の違いに理由があると思われる。高母音と低母音の「大きさ」について、川原（2017）では、「舌の位置が高くなればなるほど、その母音のイメージが小さくなり、低くなればなるほど、どの母音のイメージは大きくなる」と指摘している。従って、多量の水・液体が少しずつ運動するという、「流れる」という動きに結び付けられるのである。

（10）炎天下の試合で汗だくだくになった。（飛田・浅田2002）

（11）ざぶざぶと何杯も湯をかけて石鹸を洗い流す。（飛田・浅田2002）

ここでは、「炎天下」「何杯も」などの表現から、「多量の液体」をイメージしやすく、また、「汗」「洗い流す」から「流れる」動きがイメージしやすいと考えられる。

/a/-/o/ の組み合わせに関しては、液体の量の多さは実感できるものの、運動の範囲に関しては言い切れるものはない。

（12）インクがだぼだぼ出てきたり、寒くなったら出なくなってしまった（小野2007）

（13）水を飲みすぎて、おなかがたぽたぽする。（小野2007）

（14）朝からカルピスをがぼがぼ飲む。（小野2007）

ここで、（12）と（14）で共通しているのは、多量の液体に対しての「インクの出口」と「喉」の細さだと考えられる。つまり、/u/-/o/ が表すのは、「多量の液体が細いところから一気に通る」動きだと推測できるのである。

3.1.2　V1が /i/ のオノマトペの母音組み合わせ

/**i**/-/**a**/ →じたじた、じわじわ、ひたひた

/**i**/-/**i**/ →じみじみ

/**i**/-/**e**/ →じめじめ

/**i**/-/**o**/ →しとしと、じとじと

/**i**/-/**ya**/ →びしゃびしゃ、ぴしゃぴしゃ、びちゃびちゃ、ぴちゃぴちゃ

/**i**/-/**yo**/ →びしょびしょ、びちょびちょ

母音構造が /i/-/V2/ であるオノマトペは、「ひたひた」を除く表現を見ると、「湿り気」「にじみ出る」「湿っている」「湿る」「濡れる」という意味解釈が目立ち、また、C1=/s/・/z/ 及び C1=/b/・/p/ との共起のみが見られた。つまり、V1=/i/ の場合、直接水・液体

を表現するのではなく、水・液体が含まれている他の物に対する描写となるのである。これは前述のV1は水量を表しているという説とも関わり、/i/ が「小さい」ものを表し、それが「少ない」にも適応され、「少量」の水・液体が他の物に接触したら「姿」を消し、働きかけた結果である「湿」のみ残るのも納得できるのであろう。

まずは、語頭が /zi/ の語の例文を見よう。

(15) 外は大雨。靴ドロでじたじたに汚れた駅ホームや電車内の床を、動くモップよろしく掃除してくれる彼らに（小野2007）

(16) 包帯に血がじわじわとしみ出てきた。（飛田・浅田2002）

「ドロ」「包帯に血が」のように「少量」の液体が徐々に広がる感じを表していることがわかる。「広がる」というイメージをもたらしたのはV2の /a/ からであろう。

(17) じみじみと肌に染み込むやうな霧が眉に雫と落ちて顔に流れるのも拭はうとも思わず（小野2007）

(18) 傷口から膿がじくじくにじみ出てきた。（飛田・浅田2002）

(19) コケはじめじめした場所で生える。（飛田・浅田2002）

/i/-/i/、/i/-/u/、/i/-/e/ は /i/-/a/ と同じく、「湿る」様子を表すが、「広がる」というイメージ喚起の効果は見られなかった。

(20) 何でもじとじと雨の降ってた厭な晩で御座いましたわね（小野2007）

(21) ①梅雨時は洗濯物が乾かずしとしとしている。（飛田・浅田2002）

②昨夜から弱い雨がしとしと降り続いている。（飛田・浅田2002）

/i/-/o/ の組み合わせは「濡れる」状態を表していると考えられる。「雨の降ってた」「弱い雨」と雨の降る様子を表しているものとして用いられた場合も見られるが、他の雨の降る様子を表すオノマトペに比べ、ここでは湿って濡れる様子に注目しているイメージを与えている。

次は、第二モーラが拗音である表現の例文を見よう。前述のように川原（2017）では拗音が入ると「小さい」というイメージに結びつかれると述べている。/i/-/ya/ の組み合わせを見ると、この拗音の「小ささ」を巧みに使い、「跳ねる液体」をうまく表していることがわかり、また、/a/-ya/ に比べた場合、V1の影響で水・液体の比較的少なさ及び「水流」が感じられることがなくもない。

(22) 貰ひ湯に来てゐる人がびしゃびしゃと湯の音をさしてゐる（小野2007）

(23) 子供が風呂の湯をぴしゃぴしゃはねかして遊ぶ。(飛田・浅田2002)

(24) 裏長屋に春の雨がびちゃびちゃと降る。(飛田・浅田2002)

(25) 犬がぴちゃぴちゃ水を飲んでいる。(飛田・浅田2002)

しかしながら、/i/-/yo/ の組み合わせには「小さく跳ねる様子」は見られず、大量の水を含んで濡れた様子しか見られていない。

(26) みぞれがびしょびしょと降っている。(飛田・浅田2002)

(27) 毎日雨がびちょびちょ降ってやんなっちゃう。(飛田・浅田2002)

飛田・浅田 (2002) では、「びちょびちょ」「びしょびしょ」「びちゃびちゃ」について次のように述べている。

「びちょびちょ」は「びちゃびちゃ」に似ているが、「びちゃびちゃ」は対象が大量の水分を含んでいるだけでなく、周辺にも大量の水分があって跳ね返る様子を表す。(p.447)

これはつまり、/ya/ には /yo/ には含まれない「跳ね返る様子」が含まれているということである。

「ひたひた」はこの組み合わせから外れた存在であるとみられ、「波の揺れ動く」様子を表している。

(28)①油揚げをひたひたのだしで煮る。(飛田・浅田2002)

②波がひたひたと船端を叩いている。(飛田・浅田2002)

3.1.3 V1が /u/ のオノマトペの母音組み合わせ

/u/-/u/ →ずくずく、ぶくぶく、ぷくぷく

/yu/-/u/ →じゅくじゅく

/u/-/yo/ →ぐしょぐしょ、ぐじょぐじょ、ぐちょぐちょ

母音構造が /u/-/V2/ のオノマトペでは /u(yu)/-/u/ と /u/-/yo/ の組み合わせが多く産出されている。/o/ は唇を丸まって発音する母音であることは日本語話者の共通認識だが、実は /u/ も唇を丸まって発音する母音であることについて川原 (2017) に記述されている。つまり、V1=/u/ の組み合わせの表現はその全てが口を丸まった状態で発音する語であることがわかり、この組み合わせは水・液体に関わるものの「丸い」状態を表しているという結論が推測できる。

(29) カニがぶくぶくとあわを吹いた。(飛田・浅田2002)

(30) 雨もよひの宵などには、きまってぷくぷくと沼気を箔青海泥の堀割とに(小野2007)

ここでは、液体の中に空気が入り泡となって、その泡が膨らみ破れる様子を表していると見られる。「泡」というものイメージは「丸い」に違いない。

しかしながら、「丸い」というイメージ喚起に弱いものと思われる「ずくずく」について、「滴り落ちないほどに濡れている状態」という意味にあり、「滴り落ちないほど」の水・液体には「丸い」粒が変形する瞬間のイメージに結び付けられないこともない。

(31) 雪の中をイノシシの足跡を探しながら歩いていると、足はずくずくに濡れる。(小野2007)

「じゅくじゅく」は「じくじく」の第一子音の口蓋化したもの(山口2003)とみられ、/i/-/u/ の組み合わせの特徴が見られる。

(32) 破れた靴には冷たい雨水がじゅくじゅくとにじみこんでいた。(小野2007)

/u/-/yo/ の組み合わせは、液体により濡れ、元の形から潰れて変形したものの様子を表している。

(33) 解けかかってぐしょぐしょした雪路は。(小野2007)

(34) 雨に濡れてゐる草が歩くたび股引きに当った。そして股引きが、すぐ気持ち悪くぐじょぐじょになった。(飛田・浅田2002)

(35) 佑子の写真と便箋とがぐちょぐちょになってしまいました。(小野2007)

3.1.4 V1が /e/ のオノマトペの母音組み合わせ

/e/-/o/ →べとべと

/e/-/ya/ →べちゃべちゃ

/e/-/yo/ →べちょべちょ

パンチェワ・エレナ(2006)では母音 /e/ について擬声語・擬態語における分布は少ないと述べている。/e/ には下品なイメージが含まれており、悪い印象を喚起しているのもその理由だと考えられる。V1=/e/ の組み合わせにおいては V2=/o/ と拗音との出現が見られ、すべて不快感を与えている。「脂汗」と「泥足」は液体とも言えるが、雑物が入り不潔感による粘着性を喚起していると見られる。

(36) 背中が脂汗でべとべとする。(飛田・浅田2002)

(37) (飼い犬)べちゃべちゃの泥足で飛びつかれた。(飛田・浅田2002)

(38) 雨上がりだろう、空気がべちょべちょなんだよ（小野2007）

3.1.5　V1が /o/ のオノマトペの母音組み合わせ

/o/-/a/ →ぽたぽた、ぽたぽた

/o/-/u/ →とくとく、どくどく、どぶどぶ、ぽつぽつ

/o/-/o/ →どぼどぼ、とろとろ、こぽこぽ、ごぼごぼ、ごぽごぽ、ぼこぼこ、ぽこぽこ、ぽろぽろ、ぽとぽと、ぽとぽと

/o/-/ya/ →どしゃどしゃ

/yo/-/o/ →しょろしょろ、ちょろちょろ、しょぼしょぼ

V1が /o/ のオノマトペの全体を見ると、大きく二点の特徴が挙げられる。

一点目は、/bo/ あるいは /po/ が /t/ との組み合わせにより、「粒状の液体が落ちる音や様子」を表すことだ。例文から見られる描写対象は「墨」「雫」「血」「汗」「一粒（雨）」「涙」「水滴」で、文脈によると「一滴ずつ」のイメージが伝わる。つまり、V1=/o/ の場合「粒状の液体」を表す。

(39) 押さえても押さえても傷口からぽたぽたと血がしたたり落ちた。（飛田・浅田2002）

(40) 額から汗がぽたぽたとしたたった。（飛田・浅田2002）

(41) 灰色の空から雨がぽつぽつ落ちてきた。（飛田・浅田2002）

(42) 容疑者は大粒の涙をぽとぽとっと落とした。（飛田・浅田2002）

(43) 少年はくやし涙をぽとぽとと落とした。（飛田・浅田2002）

飛田･浅田（2002）では、「ぽたぽた」「ぽたぽた」「ぽとぽと」「「ぽとぽと」「ぽつぽつ」について次のように述べている。

（ア）「ぽたぽた」は「ぽたぽた」や「ぽとぽと」に似ているが、「ぽたぽた」のほうが液体が軽いか粒が小さく、不快・厄介の暗示がない。「ぽとぽと」は垂れた液体が一点に落ちて穴を作る暗示がある。（p.554）

（イ）「ぽとぽと」は「ぽとぽと」や「ぽたぽた」に似ているが、「ぽとぽと」のほうが液体が軽いか粒が小さく、不快・厄介の暗示がない。「ぽたぽた」は垂れた液体が平な面に衝突して広がる暗示あがる。（p.571）

（ウ）「ぽつぽつ」は対象がかたまりとして孤立して完結している暗示がある。（p.566）

（ア）による「垂れた液体が一点に落ちて穴を作る暗示」/o/-/o/ の母音の組み合わせに

は、「粒状の液体が運動（落ちる）の終わりにも元の形である丸いかたまりのままである」というイメージがあるとまとめられる。これは浜野（2014）で指摘した「はじめと終わりが同じ形ならばV1とV2は必然に同じ母音になる」ということと一致する。

また、（イ）による「平らな面に衝突する音や様子」から、/o/-/a/ の母音の組み合わせには、「粒状の液体が平面に衝突し広がる」イメージがあるとまとめられる。

（ウ）からは、/o/-/u/ の母音の組み合わせに「孤立感」が演出されたと導き出すが、母音 /u/ というより、「つ /tu/」の影響が強いと感じる。

二点目は、/o/ が、/a/ あるいは /u/ との母音交替語が多く見られたことである。

（44）時にどぶどぶ動く水が急に膝まで減った（小野2007）

（45）泥にどぼどぼ苗を突っ込むトマトの定植法を彼の篤農家は「泥づけ」と名付けたが（小野2007）

「どぶどぶ」と「どぼどぼ」はV2における /u/-/o/ の母音交替。

（46）清水が苔した岩棚をとくとくと伝って落ちた。（飛田・浅田2002）

（47）傷口から血がどくどくと出た。（飛田・浅田2002）

「どくどく」は「とくとく」の濁音化したものであり、「だくだく」との第1母音交替関係が見られる。飛田・浅田（2002）では、「どくどく」について次のように述べている。

「どくどく」は「だくだく」に似ているが、「だくだく」は汗が大量に流れ出る様子を表し、主体の疲労の暗示がある。（p.321）

（48）ホットケーキのバターがとろとろと流れた。（飛田・浅田2002）

「とろとろ」は「たらたら」との母音交替関係が見られる。これについて、飛田・浅田（2002）では次のように述べている。

「とろとろ」は「たらたら」に似ているが、「たらたら」は液体の雫が連続して流れ落ちる様子を表す。（p.337）

/b/-/k/、/p/-/k/ による泡立つ音や様子を表す組み合わせは「ぶくぶく」「ぷくぷく」と同様である。

（49）水底からぼこぼこと大きな泡が上がってきた。（飛田・浅田2002）

（50）パーコレーターがぽこぽこと泡たっている。（飛田・浅田2002）

「液体の音」を表すもので、いずれも濁音・半濁音が含まれ、金田一（1978）による /o/ の「大きい」という役割も見られ、濁るような音のイメージが強い。

（51）こぽこぽと勢いよく透明な油があふれてくる。ケーブルに詰まっている絶縁油だ（小野2007）

（52）詰まった木の葉を掃除すると、樋の水がごぼごぼと音を立てて流れ落ちた。（飛田・浅田2002）

（53）臀に煤けた土瓶へごぽごぽと注いで自在鍵へ掛けた。（飛田・浅田2002）

浜野（2014）では /r/ に「流れるような運動」のイメージがあるとしたが、水・液体に関するオノマトペから見ると、/r/ が /a/ と /o(yo)/ との組み合わせ――例えば「たらたら」「とろとろ」などのみに現れ、/i/、/u/、/e/ との組み合わせにより演出した表現はなかった。

（54）ゴム管から便器に伝い落ちる尿のしょろしょろか細い音が（小野2007）

（55）山の奥から湧き水がちょろちょろと流れている。（飛田・浅田2002）

（56）情けなくて涙がぽろぽろっとこぼれた。（飛田・浅田2002）

「しょぼしょぼ」と「どしゃどしゃ」は雨が降る様子を表す語だが、「しょぼしょぼ」は「弱弱しく降る」様子で、「どしゃどしゃ」は「非常に激しく降る」様子を表す。これは第一母音の働き、つまり拗音と /o/ との大きさ比べからもイメージしやすく、川原（2017）では、/o/ は /a/ と同じく低母音であり、大きいイメージをもたらすとしている。その「大きい」イメージが水・液体のオノマトペでは「多い」と結び付けやすくなっていると考えられる。また、母音のほか、第一子音の影響が強いと考えられる。つまり、清音 /s/ の「細かい、軽い、静か」というイメージと、濁音 /d/ の「重い、大きい、粗い」というイメージとの対立が生み出されたものと見られる。

（57）夜半に入ってしょぼしょぼ降ってきた。（飛田・浅田2002）

（58）晴れ空が一転してどしゃどしゃ雨が降り出した（山口2003）

3.2　V2が共通するオノマトペの母音組み合わせによる特徴の分析

この節における母音の組み合わせの特徴は3.1の内容を使用し、例文は省略とする。

3.2.1　V2が /a/ のオノマトペの組み合わせによる特徴

/a/-/a/ →はらはら、ばらばら、ぱらぱら、がばがば、さらさら、たらたら、だらだら

/**i**/-/**a**/ →じわじわ、じたじた、ひたひた

/**o**/-/**a**/ →ぽたぽた、ぽたぽた

/-/-/**ya**/ →ばしゃばしゃ、ぱしゃぱしゃ、びしゃびしゃ、ぴしゃぴしゃ、びちゃびちゃ、ぴちゃぴちゃ、どしゃどしゃ

「ひたひた」は「平面が連続して軽く衝突する音や様子」を表す場合、実際の音から生じた語で、それから様子をも表す語に派生したと考えられる。したがって、波を表す場合でも、「衝突」のイメージが加わっている。

「ばしゃばしゃ」「ぱしゃぱしゃ」と「びしゃびしゃ」「ぴしゃぴしゃ」は水と物の衝突により水が跳ねたり打ち当たったりする音やようすを表すが、「ばしゃばしゃ」「ぱしゃぱしゃ」は物が水にぶつかるのに対し、「びしゃびしゃ」「ぴしゃぴしゃ」は水がものにぶつかる差が見られ、「ばしゃばしゃ」は波が岸などに打ち当たる場合に用いられ、「びしゃびしゃ」は雨が降る様子に用いられる。これらの表現はともに第２モーラ /sya/ の働きが見えるが、「どしゃどしゃ」が「雨の降る様子」を表すのも、/sya/ により多量の雨が激しく地面に打ち当たる様子を表現したと思われる。

3.2.2　V2が /i/ のオノマトペの組み合わせによる特徴

/**i**/-/**i**/ →じみじみ

V2が /i/ の語は「じみじみ」一語のみで、/i/-/i/ の組み合わせによる「線状・細さ」と第１子音 /z/ による「不快感」で、「少しずつ厭になる感じ」が音の響きより伝わる。

3.2.3　V2が /u/ のオノマトペの組み合わせによる特徴

/**a**/-/**u**/ →だくだく、ざぶざぶ

/**i**/-/**u**/ →じくじく

/**u**/-/**u**/ →ずくずく、ぶくぶく、ぷくぷく

/**o**/-/**u**/ →ぽつぽつ、とくとく、どくどく、どぶどぶ

/**yu**/-/**u**/ →じゅくじゅく

「だくだく」と「どくどく」はともに液体が多量に流れる様子を表し、「だくだく」は主に汗に用いられ、「どくどく」は血によく用いられる。両語は /d/-/k/ の子音の組み合わせのもので、同じく先頭に低母音の /a/、/o/ と後続の高母音 /u/ の繰り返しで、これは毛穴や血管の伸縮の繰り返しのイメージを喚起させる。

「ざぶざぶ」と「どぶどぶ」はともに「水の激しい運動」を表すが、「ざぶざぶ」は外力が加わったイメージがあり、「大量の水を揺らすときの音や様子」の意で、「どぶどぶ」に

は「大量の水が揺れ動く音や様子」という外力の痕跡はない。

3.2.4　V2が /e/ のオノマトペの組み合わせによる特徴

/**i**/-/**e**/ →じめじめ

V2が /i/ の場合と同じく、V2=/e/ も一語のみ。/e/ による不快感が伝わる。

3.2.5　V2が /o/ のオノマトペの組み合わせによる特徴

/**a**/-/**o**/ →だぼだぼ、がぼがぼ、たぽたぽ

/**i**/-/**o**/ →しとしと、じとじと

/**e**/-/**o**/ →べとべと

/**o**/-/**o**/ →ぼとぼと、ぽとぽと、ぽろぽろ、とろとろ、こぽこぽ、ごぽごぽ、ごぼごぼ、どぼどぼ、ぼこぼこ、ぽこぽこ

/**yo**/-/**o**/ →しょぼしょぼ、しょろしょろ、ちょろちょろ

/-/-/**yo**/ →びしょびしょ、びちょびちょ、ぐしょぐしょ、ぐちょぐちょ、べちょべちょ

山口（2003）によると、「たぼたぼ」の類義語として「だぶだぶ」が挙げられ、「だぼだぼ」のほうの程度が大きく、「がぼがぼ」も「がばがば」の類義語として、「がばがば」のほうが流れも速く、隙間も大きいとのことである。つまり、V1の /a/ により同じく多量の液体の運動を表すが、運動の程度とすれば /a/>/o/>/u/ という順になると考えられよう。

3.3　母音の組み合わせによる音象徴の分析・考察のまとめ

本研究で分析の対象としたオノマトペの特徴はすべて母音の組み合わせから得られなかったが、分析できたものに関しては、次の表１のように示す。

表でわかるように、V1=/a/ の場合水・液体の量は非常に多く、水の運動の程度は V2 により /a/>/o/>/u/ の順になっている。

V1=/i/、/u/、/e/ の場合、濁音と拗音との組み合わせが多く見られ、「濡れる様子」を表すが、「不快感」が伴う。

V1=/o/ における水・液体のオノマトペは全体的に粒状の液体の落下運動を表すものが多く、V2=/a/ の広がるイメージ、V2=/u/ の孤立感、V2=/o/ のかたまりの印象が写された。

また、拗音について、/ya/ は川原（2017）に述べた通り、「小さい」イメージと結び付けやすいが、/yu/ には見られなかった。/yo/ に関しては、V1に位置する場合「少ない」

という「小さい」と結び付けやすい印象はあるものの、V2に位置する場合そのような傾向は見られなかった。

【表１】 日本語の水・液体に関するオノマトペの音象徴：母音の場合

V1＼V2	/a/	/i/	/u/	/e/	/o/
/a/	多量の水・液体の広範囲運動―がばがば、ばらばら	―	多量の水が細いところから一気に通る様子―だくだく	―	水量は多く、運動の範囲も広いがV2=/a/の程ではない―がぼがぼ
/i/	・C1=/z/との組み合わせにより「不快感」を出せる―じたじた、・V2=/ya/の場合、飛び跳ねる様子―びしゃびしゃ	じみじみ	じくじく	じめじめ	・「濡れる」―しとしと ・V2=/yo/の場合、濡れた物体の「乱れた」状態を表す―びちょびちょ
/u/	―	―	濡れる様子―ずくずく	―	V2=/yo/濡れたものの「乱れた状態」―ぐしょぐしょ
/e/	粘着性（不快感）	―	―	―	粘着性（不快感）
/o/	粒状の液体が平面にぶつかり広がるイメージ―ぽたぽた	―	孤立感を演出―ぽつぽつ	―	粒状の液体かたまりとして一点に深く落ちる―ぽとぽと、ぼとぼと

４．子音の組み合わせから見る音象徴の分析・考察

当節では、子音の組み合わせによる音象徴について分析・考察する。

子音の組み合わせに関して、まずC1は/s/・/z/、/t/・/d/、/b/・/p/など清・濁、濁・半濁の対を成す子音にオノマトペが集中しており、それが子音交替の発生を促したと考えられる。また、C2には濁音が一語のみ/z/に現れた。その代わり「流れるような運動を表す」/r/が比較的多く見られた。

浜野（2014）では、子音についてC1は「触感／重さ」を表し、C2は「動き」を表すとしている。ここでは、子音の組み合わせによる特徴はC1の共通するもの、C2の共通するものそれぞれ分析を進めていくことにする。

4.1　C1が共通するオノマトペの子音組み合わせによる特徴の分析

4.1.1　C1が/k/・/g/のオノマトペの子音組み合わせ

―こぽこぽ、がばがば、がぼがぼ、ごぼごぼ、ごぽごぽ、ぐしょぐしょ、ぐじょぐじょ、

ぐちょぐちょ

/k/-/p/ の組み合わせは「こぽこぽ」一語のみで、水の音を表す。

「ごぽごぽ」の場合、酒を注ぐ様子を表すのによく用いられる。「ごぼごぼ」はこもった感じの鈍い音を表し、水が湧き出る様子や溜まった水に流れ込む水音など表すときに使われる。

「がばがば」と「がぼがぼ」の二語も水が激しく揺れ動く「水の音」を表し、/g/-/b/ の組み合わせによるものだと考えられよう。

「ぐしょ」「ぐじょ」「ぐちょ」は水・液体が含まれた物の「乱れた状態」を表す。C1=/g/ という濁音と第二モーラの拗音により「汚いもの」「品の欠ける」特徴からしても、「乱れた状態」が容易に想像できる。「ぐしょぐしょ」は液体を含んだものが柔らかくなった様子を表し、「ぐじょぐじょ」はダブル濁音により汚いイメージが強く、「ぐちょぐちょ」には C2＝ /t/ の「密着」により「粘り気」が薄々感じられる。

4.1.2　C1が /s/・/z/ のオノマトペの子音組み合わせ

―しょぼしょぼ、しとしと、さらさら、しょろしょろ、じくじく、じゅくじゅく、ずくずく、さぶさぶ、じみじみ、じめじめ、じたじた、じとじと

C1＝ /s/ の場合、「抵抗のなさ」「摩擦のなさ」など基本的に「粘り気のなさ」を表す。

/s/-/t/ の組み合わせは「適度に湿る」様子、「線状で落ちる」様子を表し、/s/-/r/ には「抵抗なく流れる」意味で摩擦が少なく滑らかさの印象を与える。

C1＝ /z/ の語は V1＝ /i/ との組み合わせが多く見られ、母音の組み合わせの特徴で述べたように「汚いもの」のイメージが強い。

ここでは、/s/-/z/ の子音交替が起こるに伴い、語の印象がプラスイメージからマイナスイメージに転じる。

浜野（2014）における子音の意味特徴に関する記述において /zi/ は有声阻害音の影響で「不快さ」につながると述べている。さらに、/t/ が C2に位置する場合「密着、合致」を表すとも述べている。また、山口（2003）では、次のように述べている。

> 「じとじと」「じめじめ」「じくじく」は同じく不快な湿気を表し、「じとじと」が粘りつくような不快な湿気であるのに対し、「じめじめ」は陰気で不快な湿気、「じくじく」は水分がにじみ出るような湿気を表す。

これらの説明から、「じとじと」の「粘り気」のある「不快さ」の意味特徴においては

/z/ が「不快感」を表し、「粘り気」は /t/ の影響を受けたと推測できる。

4.1.3　C1が /t/・/d/ のオノマトペの子音組み合わせ

—とくとく、たぽたぽ、たらたら、とろとろ、ちょろちょろ、だくだく、どくどく、だぼだぼ、どぼどぼ、どぶどぶ、どしゃどしゃ、だらだら

「とくとく」は「どくどく」と子音の清濁により区別されるもので、細い口から多量な液体が流れ出る様子を表す。「どくどく」のほうが液体の量も多く、流れ具合も盛んである。

「たぽたぽ」は「だぼだぼ」と対応しており、容器に液体が揺れ動く様子を表し、そこからお腹が水でいっぱいになる様子を表す意味に派生する。「だぼだぼ」のほうが水の量も多く、生じる音が鈍くなり、深さも感じる。「たぽたぽ」は液体の動きのみに用いられるが、「だぼだぼ」は服などが大きすぎるさまも表す。

/t/-/r/ のペアの語は、液体が流れる様子を表す。/s/-/r/ の組み合わせによる「液体の流れる様子」に比べ、/t/ により液体に「粘り気」が感じられる。

「だらだら」と「だくだく」は類似語（浅田・飛田2002）とされ、「だらだら」は大量の液体のしずくが線状に流れる様子を表し、不快の暗示があるのに対して、「だくだく」は汗にだけ用いられる。

また、「たらたら」と似た語として、「とろとろ」と「だらだら」が挙げられ、両方とも「たらたら」より液体の濃度が高いとされる（浅田・飛田2002）。そこで、「とろとろ」のプラスイメージと「だらだら」のマイナスイメージの差が使い分けのポイントとなるのであろう。

4.1.4　C1が /b/・/p/ のオノマトペの子音組み合わせ

—ぶくぶく、ぼこぼこ、びしゃびしゃ、びしょびしょ、ばしゃばしゃ、びちゃっ、びちゃびちゃ、びちょびちょ、べちゃべちゃ、べちょべちょ、べとべと、ぼたぼた、ぼとぼと、ぷくぷく、ぽこぽこ、ぴしゃぴしゃ、ぱしゃぱしゃ、ぴちゃぴちゃ、ぽたぽた、ぽつぽつ、ぽとぽと、ぱらぱら、ぽろぽろ

「びしょびしょ」と「びちょびちょ」は大量の水分を含んで濡れている様子を表し、似ている語だが、「びちょびちょ」は「密着」の暗示がある。

/b/-/k/ の子音ペアは泡を表す。

/bo/-/t/ の組み合わせは水滴の落ちる様子を表す。

「ぴちゃぴちゃ」は V2=/t/ により「密着」のイメージが含意され、対象と水とが「密着する」ニュアンスで、愛情の暗示を伴うことがある。「ぴしゃぴしゃ」は「ぴちゃぴちゃ」

に似ているが、少量の水が跳ね返る様子をあらわし、対象に対する主体の思い入れがない。

/b/-/k/ の子音の組み合わせは /p/-/k/ と同じく泡を表し、V1=/p/ のほうが激しく、評価のほうについては、/b/-/k/ がマイナスイメージで、/p/-/k/ は可愛らしい膨れ方を表す。

/po/-/t/ の組み合わせは /bo/-/t/ と同じく水滴の落ちる様子を表し、/bo/ のほうが水滴に重みを感じ、粘液状の物の落ちる音や様子を喚起させる。

浅田・飛田（2002）では、「びしょびしょ」と「びちょびちょ」について、「びしょびしょ」と「びちょびちょ」は大量の水分を含んで濡れている様子を表し、似ている語だが、「びちょびちょ」は「密着」の暗示があるとし、「ぴしゃぴしゃ」と「ぴちゃぴちゃ」について、「ぴちゃぴちゃ」では、対象と水とが「密着する」ニュアンスで、愛情の暗示を伴うことがある。「ぴしゃぴしゃ」は「ぴちゃぴちゃ」に似ているが、少量の水が跳ね返る様子をあらわし、対象に対する主体の思い入れがないとした。

また、「べちゃべちゃ」「べちょべちょ」「べとべと」は「粘着性」を表す表現だ。

つまり、これらの意味特徴から見ると、/b/-/t/、/p/-/t/ の組み合わせには「粘り気」が表されると推測できる。

4.1.5　その他のオノマトペの子音組み合わせ

—ひたひた、はらはら

「ひたひた」「はらはら」に共通しているイメージとした「揺れる」が挙げられるが、これは共通子音 /h/ からの影響ではないかと考えられる。

4.2　C2が共通するオノマトペの子音組み合わせによる特徴の分析

ここからは、C2が共通するオノマトペの子音の組み合わせによる特徴について分析する。

4.2.1　C2が /k/ のオノマトペの子音組み合わせ

—ぶくぶく、ぼこぼこ、ぷくぷく、ぽこぽこ、じくじく、じゅくじゅく、ずくずく、とくとく、だくだく、どくどく

/b/-/k/、/p/-/k/ の組み合わせは前述のように泡立つ音を表す。

その他の /C2/-/k/ の組み合わせを見ると、「じくじく」の傷口から膿などが滲み出る、「とくとく」の容器の小さい口から液体が流れ出る、「だくだく」の汗が出る、「どくどく」の傷口から血が多量に出るという意味特徴から、「狭いところから液体が流れ出る」という共通点が見られる。

4.2.2　C2が /s/・/z/ のオノマトペの子音組み合わせ

―ぐしょぐしょ、ばしゃばしゃ、びしゃびしゃ、びしょびしょ、ぱしゃぱしゃ、ぴしゃぴしゃ、どしゃどしゃ、ぐじょぐじょ

C2=/s/ の場合、拗音のみ見られる。V2=/ya/ の水・液体の跳ね返る様子を表すのに対して、V2=/yo/ は水分に濡れたものの乱れた状態を表す。

C2=/z/ の語は一語のみ。「ぐじょぐじょ」は「ぐしょぐしょ」の濁音化したもので、汚い感じ、気持ち悪い感じが伴う。

4.2.3　C2が /t/ のオノマトペの子音組み合わせ

―ひたひた、ぐちょぐちょ、びちゃびちゃ、びちょびちょ、べちゃべちゃ、べちょべちょ、べとべと、ぼたぼた、ぼとぼと、しとしと、ぴちゃぴちゃ、ぽたぽた、ぽつぽつ、ぽとぽと、じとじと、じたじた

C2=/t/ の場合、第一モーラに清濁・濁半濁の子音交替が多発していることがみられ、/t/ には「密着」「粘着性」が感じられる。

4.2.4　C2が /b/・/p/ のオノマトペの子音組み合わせ

―がばがば、がぼがぼ、ごぼごぼ、しょぼしょぼ、ざぶざぶ、だぼだぼ、どぼどぼ、どぶどぶ、こぽこぽ、ごぽごぽ、たぽたぽ

/g/-/b/ の組み合わせの「がばがば」「がぼがぼ」「ごぼごぼ」と、/z/-/b/ の「ざぶざぶ」と、/d/-/b/ の組み合わせの「だぼだぼ」「どぼどぼ」「どぶどぶ」との第１子音が濁音且 C2＝ /b/ の表現はすべて「多量の液体が揺れ動く音」を表している。

4.2.5　C2が /r/ のオノマトペの子音組み合わせ

―はらはら、ばらばら、さらさら、しょろしょろ、ぱらぱら、ぽろぽろ、たらたら、とろとろ、ちょろちょろ、だらだら

C2=/r/ の語には「流れるような運動」を表す。

/s/-/r/ の組み合わせは、水流が滑らかに流れる様子を表す。

/t/-/r/、/d/-/r/ の組み合わせにおいて流れる液体にとろみが感じられる。

4.2.6　その他の子音組み合わせ

―じみじみ、じめじめ、じわじわ

「じみじみ」と「じめじめ」は勿論、「じわじわ」にも嫌な感じをもたらすのはC1＝/zi/の影響を多く受けていると考えられる。

4.3　子音の組み合わせから分析した音象徴のまとめ

子音の組み合わせからは、C1またはC2としての役割がはっきりしているものとそうでないものがそれぞれ見られた。

以下に子音ごとの役割について表にまとめる。

【表２】　日本語の水・液体に関するオノマトペの音象徴のまとめ：子音の場合

位置と音象徴		
子音	C1	C2
k	こぽこぽ	・C1＝/b//p/：泡立ってる音 ぷくぷく、ぼこぼこ ・C1が濁音且V2=/u/:狭いところから液体が流れ出る じくじく、だくだく
g	・C2＝/b/：多量の水の大きい音 ごぼごぼ、がばがば ・V2=/yo/：濡れた物の乱れた状態 ぐちょぐちょ、ぐしょぐしょ	
s	・C2=/t/：気持ちのいい濡れ具合、潤いしとしと ・C2＝/r/：粘り気のない液体が流れる さらさら、しょろしょろ	・拗音のみ見られる 「や」拗音：液体の跳ね返るようす びしゃびしゃ 「よ」拗音：水分過多で、濡れる びしょびしょ
z	・マイナスイメージ、不快を感じる濡れ具合 じとじと、じめじめ	・汚い感じ ぐじょぐじょ
t	・C2＝/r/:とろみのある液体が流れる とろとろ、たらたら	・C1＝/b//p/:水滴の落下 ぽとぽと、ぽたぽた ・C1=/b/且V1が狭母音の場合：粘り気のある様子 べとべと、びちょびちょ
d	・C2＝/k/：（汗など）液体が流れ出る だくだく、どくどく ・C2＝/b/：（酒など）注ぎかける だぼだぼ、どぼどぼ ・C2＝/r/：液体が流れ落ちる だらだら	

h	・揺れる はらはら、ひたひた	
b	・V2=/ya/：水滴の跳ね返る様子 びしゃびしゃ、びちゃびちゃ ・V2=/yo/：水分に濡れる様子 びちょびちょ、びしょびしょ	
p	・C2＝ /t/：水滴が落ちる（V1=/o/） ぽとぽと ・C2＝ /r/：水滴が落ちる ぱらぱら	
m		・粘着性 じめじめ、じみじみ
r		・C1＝ /s/: 液体が滑らかに流れる さらさら、しょろしょろ ・C1＝ /t/・/d/：とろみのある液体が流れる とろとろ、だらだら ・C1＝ /h/・/b/・/p/：液体が一滴ずつ落下する ぽろぽろ、ぱらぱら
w		・浸透性 じわじわ
子音	C1	C2

5．まとめ

日本語のオノマトペの音象徴について以下のようにまとめる。

母音に関しては、水・液体の量が母音により左右されたとみられる。特に、/a/・/u/・/o/ が多く見られた。/a/ が V1に位置する時には「多量の液体」を表し、V2に位置する場合には水の「広がる」運動を表した。/i/ に関しては子音 /z/ との組み合わせで「不快感」を想起させる、第二モーラに拗音がつくことにより「状態の乱れ」を表すということが分かった。/e/ もイメージのいい語ではなく、「粘着性」を表した。/u/ は水の激しい運動を表し、第二モーラの拗音と共起し「乱れ」を表した。/o/ は主に水滴の運動を表した。

また、拗音に関して、/ya/ には「少ない、細かい、細い」など「小さい」と結び付けやすいイメージは見られたものの、/yu/ には見られず、/yo/ は V1に位置する場合のみ「小さい」という印象を与えた。

子音に関しては、/k/・/g/、/s/・/z/、/t/・/d/、/b/・/p/ という清濁、濁・半濁の対を成す子音が主に表出された。清濁のペアで現れる語が多数見られ、清濁により語義の変化が起きた場合もあった。また、/s/-/r/、/t/-/r/ という C2=/r/ により「液体の流れ

る様子」を表し、/b/-/k/、/p/-/k/ の組み合わせで「泡立つ音」を表し、/g/-/b/、/z/-/n/、/d/-/b/ という C1= 濁音と C2= /b/ の組み合わせにより「激しく揺れ動く水の音」を表す傾向が見られた。

日本語における水・液体に関するオノマトペの全体を見ると、「水滴の落下」様子を表す表現、「液体が流れる」様子を表す表現、「濡れる・湿る」様子を表す表現で構成されたと見える。その中「濡れる・湿る」様子を表す表現には「粘着性」が伴い、ほとんどがマイナスイメージを喚起する語であった。

本研究では「水・液体に関するオノマトペ」という「特定事象」に限定し、より具体的な音象徴性を分析・抽出が可能であると考えた。また、オノマトペの「連なる音」の音象徴性に注目し、音素ごとのみならず、母音と母音、子音と子音それぞれの組み合わせによる音象徴性を明らかにすることに試みた。

しかしながら、「組み合わせ」ということに注目したが故に、対象となるオノマトペを選出する際、「すっぷり」「しっぽり」のような母音と子音だけではなく、特殊拍と語尾「リ」の影響を多く受けていると見られる表現にまで考慮しかねたところもあった。

今後は、「水・液体に関するオノマトペ」に留まらず、その他の特定の事象に関するオノマトペの音の組み合わせについても分析を行い、事象ごとの傾向を見出すことにも試みたい。

参考文献

浅野鶴子・金田一春彦（1978）『擬音語・擬態語辞典』角川書店　p.3

泉邦寿（1976）「擬声語・擬態語の特質」鈴木孝夫編『日本語の語彙と表現』大修館書店　p.105

雨宮俊彦・水谷聡秀（2006）「日本語オノマトペの基本感情次元と日本語音感素の基本レベルについて」関西大学『社会学部紀要』第37巻第２号2006，p.139

川原繁人（2017）『「あ」は「い」より大きい！？』ひつじ書房

田守育啓（1993）「日本語オノマトペの音韻形態」『オノマトピア・擬音・擬態語の楽園』筧壽雄・田守育啓　編　勁草書房1993　p.1

田守育啓（2002）『オノマトペ擬音・擬態語を楽しむ』岩波書店

パンチェワ・エレナ（Pantcheva.Elena）（2006）「日本語の擬声語・擬態語における形態と意味の相関についての研究」『千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書』123巻 p.79

浜野祥子（2014）『日本語のオノマトペ音象徴と構造』くろしお出版

参考辞典

浅野鶴子・金田一春彦（1978）『擬音語・擬態語辞典』角川書店

小野正弘（2007）『擬音語・擬態語4500日本語オノマトペ辞典』小学館

山口仲美（2003）『暮らしのことば擬音・擬態語辞典』講談社